

## 書評

### 『あんぷく・太田雅孝詩集』

早乙女

忠

詩は言葉のリズムであり、物語であり、ときには批評作品になる。表題の「あんぷく」は辞書を引くと「按腹」だが、少年だった詩人にとって「生まれて初めて覚えた呪文」の言葉だった。生家の近くの古い家屋の門柱に「東京府南豊玉郡中野三九」という戦前の地名の木札が「糞虫のようにぶらさがっていた」が、道の向こう側の建物の外壁に「あんぷくちちもみ／もみりょうじ」とリズムミカルに仮名で書かれた看板がかかっていた。半世紀近く前の中野区中野の一風景である。場面は変転して浅間山（せんげんやま）の雑木林に移る。三十年ほど経ているだろうか。多摩墓地の西南のほずれに位置する浅間山はあまり人に知られていないかもしれない。東京で一番低い山は芝にある愛宕山だろうが、それに次いで低いように思われる。愛宕山と同じく山頂に祠が祀られている。山を覆う灌木のあいだを詩人はそよ風に吹かれて散策する。私も連れていってもらったことがある。

詩的空間はどこかのコーヒー・ハウスの中にも拡がる。そこは「つかの間のエデン」だ。ウェイトレスがイヴになり、エデンを訪ねたアダムは窓際の席に坐ってエデンの外を眺める。

……俯きながら歩く人が通る  
もう二度と躓かないように  
地べたばかりを見ていようというわけか

そうかなあ  
わたしは思いきって顔を上げてみる  
たまには宝石のような蒼い空を見たいからだ

人生を戦って生きてきた人はつねに「陽気だ」とイエイツが歌っているが、ここにも「陽気な」詩人がいる。「ことばと

心」という作品のなかの「君の心にことばがあるか？／＼  
たおれたら／＼起き上がればいいんです／＼といえるような声が  
／あるか？」という疑問形式の語句は「陽気な」詩人になる  
うとする決意の表明だろう。

しかしひとは時に深いメランコリーに陥る。これまでに見  
た風景の詩と並んで人物の詩が何篇かある。この詩集はロバ  
ト・アダムズ（一九六〇年～二〇〇〇年）という冗談好きの  
アメリカ人の友人に捧げられているが、単独の作品として  
「ボブへの追悼詩」という佳品が収められている。ロバート、  
愛称ボブは日本思想史を研究する若い学徒で、ボブがシカゴ  
大学の院生だった時、留学中の作者のルームメイトになった。  
その後来日して上智大学に籍を置いて研究者の途を歩んだが、  
癌を病み、それが転移し、しばらくして死去した。死ぬ間際  
に「ぼくは珍種の癌のコレクターなんだ」という苦いユーモ  
アを仕掛けた手紙を送ってくる。ボブの強い克己心と柔軟な  
感性には驚くばかりである。「君の死の知らせは鋭く／深く  
深く深く僕の心を抉った」。だがこの詩の中心をなすのはシ  
カゴ大学時代の些細な日常生活の一齣である。

あれはもう二十年前のことだ

高い塔の天辺にある僕らの部屋に

どこからともなく突風が吹き込み

たまたま開けてあった君の窓辺から

たまたま置いてあった大事な君の論文が

たちまち宙に舞い上がり

暗い暗い闇の中へ

人魂のように吸い込まれていった

……寒い中に拾いに出ていくと

不思議なことに

後から君が笑いながら現れた

覚えているかい？

できることなら今度も――

だが今度はそうはいかなかった

作者がかねて読んでいるオーデンに倣った書き方だろうか。  
痛切な想いを軽い言語装置（ライト・ヴァース）によって柔  
らげ、私的生活の断片を積み重ねて人生の悲劇に対処しよう  
とする。詩のエピソードは単に面白い話ではなく、自己の、  
また他者の中核となるものを示唆しなければならぬ。その  
ために生活と作品のあいだに引かれた境界線を越える飛躍の  
作法が不可欠なのだ。その詩法のおかげで私も未知のアメリ  
カ人ボブの無垢な笑顔を思い浮かべることができる。

いまオーデンに言及したが、オーデンの墓を詣でる「キル  
ヒシュテッテン紀行」という作品を取り上げよう。ウィーン  
からキルヒシュテッテンまで各駅停車で三十分かかるという。  
作者はすでに電車のなかにいる。

禁煙だって？まさか あのチェーン・スモーカーが乗って  
いたはずなのに

でもがらがらの三両編成の各駅停車はわるくない ぼくが  
画家なら

パレットの上が緑と青ばかりになりそうな一日だ  
三十分も揺られてきたかな 駅前にはパブが一軒だけ

パブの主人は通訳の若者を呼んでくれた。パブにいる農夫  
のなかに、「オーデンの柩をこうやって担いだんだ」といっ  
て自分の肩を叩いてみせる」男がいた。パブを出た詩人は、  
フリードホフ教会墓地に立つオーデン記念館に向かう。

明るい光につつまれた土の小径が〈オーデン通り〉

そのすぐそばに田舎風の〈オーデン・ハウス〉

……咲き乱れる花と風に揺れる木の葉

この牧歌的な陽光あふれる小さな農村で 後年

詩人は過去の敵のことを想い浮かべていたかもしれない……

オーデンは都会型の政治詩人と考えられているが、〈オーデ  
ン通り〉は舗装された道路ではなく、また〈オーデン・ハウ  
ス〉は地味な田舎家だという。この詩は批評作品であり、そ  
れを読んでオーデンの孤独と節度を感じ取り、私はオーデン  
の詩を読み直したい気持ちに駆り立てられた。

アメリカ人の好青年ロバート・アダムズと二十世紀屈指の  
大詩人オーデンが親しみをこめた表情で私たちに語りかけて  
くる。やがて浅間山の林道とキルヒシュテッテンの田舎道が  
一本に連なり、そこを太田雅孝氏がひとり歩いているのが見  
えてきた。

(二〇〇五年十月 国文社刊 一〇七頁)